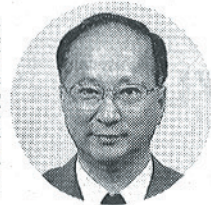


コエンザイムQ協が発足

普及と研究の推進役に



山本 順寛理事長

重要な抗酸化物質として近年注目を集めている物質、コエンザイムQ(解説)の知識普及と研究促進を目的として、「日本コエンザイムQ協会」が1日発足した。この物質は心筋症など

の心不全、がん、糖尿病など成人病に有効とされ、老化防止や美容効果のある健康食品として有望視されている。サプリメントとして、米国での市場規模は二五〇億円以上といわれるが、日本では昨年3月に医薬品から食品へと分類されたばかり。協会は今後、賛助会員を募り、一般への情報提供や未解明部分の研究を推進める。

理事長には、東大大学院化学生命工学の助教である山本順寛氏が着任した。同氏は「コエンザイムQは高齢化社会の切り札となる」とその有用性を強調する。一方で吸収効率や適正摂取量など統一した見解がない部分もあり、機能解明をさらに進める必要性を指摘している。

同協会は「国際コエンザイムQ10協会」の日本支部として位置づけられる。来年2月末に第一回総会を開き、具体的な運営方針などを定める予定。

コエンザイムQ 人のすべての細胞中に存在するミトコンドリアの働きに欠かせない物質として、一九五七年に発見された。何らかの原因でミトコンドリアの働きが悪化すると体にさまざまな障害が現れやすい。特に脳や筋肉などの機能不全が報告されている。コエンザイムQは体内で生成されるが、老化とともに体内レベルが低下する。医学界では近年、ミトコンドリアのゲノム(遺伝子情報)研究がさかんに行われている。

(本宮)

コエンザイムQの量産化は日本でのみ成功している。現在、鐘紡化学、日清ファルマ、旭化成、三菱化学が生産しており、国内では協和発酵やエーザイなど約五〇社がサプリメントとして販売している。食品のため効率表示に限界もあり、知名度はまだ低い。物質としての特性を周知することで、消費拡大が期待されている。